

さんぶんし かせい しばい
散文詩 火星の芝居

いしかわ たくぼく
著者：石川 啄木

なん おもしろ こと
『何か面白い事はないか？』

おれ ゆうべかせい い き
『俺は昨夜火星に行って来た。』

『そうかえ』

ほんと い き
『真個に行って来たよ。』

おもしろ
『面白いものでもあったか？』

しばい み
『芝居を見たんだ。』

にほん めいど ひきやく かせい てんじょう ひきやく や
『そうか。日本なら「冥途の飛脚」だが、火星じゃ「天上の飛脚」でも演るんだろう？』

そんな だいいち げきじょう ちが
『其麼ケチなもんじゃない。第一 劇場からして違ふよ。』

いちりしほう
『一里四方もあるのか？』

ぼ か こと い ま あおぞら じゅうりしほうくらい おお き あっさく いし いし
『莫迦な事を言え。先ず青空を十里四方の大さに截つて、それを壓搾して石にするんだ。石

かた あお すきとお
よりも堅くて青くて透徹るよ。』

なん
『それが何だい？』

つ かさ たか たか むさいげん たか かべ きず あ しか にれつ かべ
『それを積み重ねて、高い、高い、無際限に高い壁を築き上げたもんだ、然も二列にだ。壁と

かべ あいだ ただごけんぐらい むさいげん たか あお そら いっぽん ぎん いと よう み
壁との間 が唯五間位しかないが無際限に高いので、仰ぐと空が一本の銀の糸の様に見え

る。』

ごけん ぶたい しばい
『五間の舞臺で芝居がやれるのか？』

き たま あお かべ ど こ つづ わか ぼんり ちようじょう にじゅう
『まあ聞き給え。その青い壁が何處まで続いているのか解らない。萬里の長城を二重にして、

あお ぬ よう
青く塗った様なもんだね』

ど こ しばい や
『何處で芝居を演るんだ？』

しばい かべ つま はなみち
『芝居はまだだよ。その壁が詰り花道なんだ。』

たくさん よ
『もう沢山だ。止せよ。』

はなみち はいゆう ま かんきやく いんそつ い かせい きみ はいゆう こくおう けんりよく
『その花道を、俳優が先ず看客を引率して行くのだ。火星じゃ君、俳優が国王よりも権力があ

しばい はじ こくみん ひとりのこ けんぶつ けんぼう
って、芝居が初まると国民が一人残らず見物しなげやならん憲法があるのだから、それはそれ

ひじょう おおいり おおじかけ しばい じゅんび じゅつ げつ
は非常な大入だよ、そんな大仕掛な芝居だから、準備にばかりも十カ月かかるそうだ』

さん おな
『お産をすると同じだね』

はいゆう すてき かせい にんげん いったいぼくら あし ちいさ むね たか
『その俳優というのがまた素的だ。火星の人間は、一体僕等より足が小さくて胸が高くて、そして

あたま むやみ おお うち もつと あし ちいさ もつと むね たか もつと あたま おお やつ
頭が無暗に大きいんだが、その中でも最も足が小さくて最も胸が高くて、最も頭の大きい奴が

だいいちりゆう はいゆう きみ かせい だんじゅうろう かいどう まるてんじょう
第一流の俳優になる。だから君、火星のアアビングや団十郎は、ニコライの会堂の円天蓋より

おお ぐらい えぼし かぶ
も大きい位な烏帽子を冠ってるよ』

おどろ
『驚いた』

おどろ
『驚くだろう？』

きみ ほら
『君の法螺にさ』

ほら ほんと こと すくな ゆめ なか じじつ きみ かいどう やね かぶ
『法螺じゃない、真実の事だ。少くとも夢の中の事実だ。それで君、ニコライの会堂の屋根を冠

はいゆう なんじゅうおく かんきやく みちび はなみち あんない い
った俳優が、何十億の看客を導いて花道から案内して行くんだ』

はなみち かんきやく あんない
『花道から看客を案内するのか？』

そこ ちきゅう ちが
『そうだ。其処が地球と違ってるね』

そこ
『其処ばかりじゃない』